古代アメリカ学会会報

第 42 号

ボリビア、モホス平原、ロマ・チュチニ遺跡出土土偶　　©井上恭平

目次

◆特集：ミュージアムをつくる、ミュージアムを活かす　1
◆書籍紹介　16
◆学会協力事業の報告　18
◆事務局からのお知らせ　21
◆編集後記　23

2017 年 7 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

特集：ミュージアムをつくる、ミュージアムを活かす

研究者にとってミュージアムは実践の場である。ミュージアムは、研究成果の社会還元の場、地域社会に対する生涯学習の場、地域住民との協働の場、ときには研究調査の場となることさえある。今号の特集では、ペルー、ニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドル、メキシコ、さらに日本のミュージアムにおける実践事例を、考古学、博物館学、文化人類学といった分野の研究者から紹介いただく。研究論文ではあまり語られない展示の工夫や普及活動の裏側、地域住民との折衝の背景を知る機会として本特集を位置づけたい。

●モバイルミュージアムをつくる

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

朝のワヌコ市街を一望するホテルの屋上で、感慨深く、3M 社のスプレーのり 77 を吹く。日本から持参しようにもスプレーは飛行機に持ち込めないが、いまやこの地方都市でもホームセンターで購入できるのだ。同じ店で 75cm 角にカットしてもらった黒いメラミン化粧板に、74cm 角のプリントアウト原稿を貼っていく。印刷屋はワヌコ大学の門前に軒を連ねており、PDF ファイルを持参すると即座に出力できた。大学博物館教員という立場がやや特殊なのだとは思うが、私は毎年自分の手で展示を作っている。ペルーでは両面テープひとつ簡単に手に入らない、と嘆いていたのはつい3～4年前のことだと思うのだが、モノ作りの環境は着実に向上しているようでありがたい。完成した 5 枚の展示パネルは、コトシュ遺跡公園内の博物館の壁に打ち付けた。草葺きの簡素な建物で、何年も土器の素朴なレプリカばかり展示していたが、2016 年 10 月に加わったパネル展示「Memorias Huanuqueñas en Tokio（ワヌコの記憶＠東京）」は、旅行者や観光ガイド、それに地域住民が熱心に見てくれているようである。

私の勤める東京大学総合研究博物館（以下 UMUT）には写真や日誌など、1960 年代の東京大学によるコトシュ遺跡発掘調査の資料が収蔵されている。当時の人物・風景・出来事など、地域史を物語る写真を中心に選び、解説を添えてパネルとして編集したのである。展示制作の大きな動機は 2008 年、藤井龍彦氏（国立民族学博物館名誉教授）らがワヌコ市民を対象に聞き取り調査を行い、不正確な言説が流布している状況がわかったことにある。神殿の壁を飾っていた一対の土製レリーフ「交差した手」はワヌコ州のシンボルとして親しまれているが、現物は地元に存在しない。一つは発見の翌年何者かに破壊され、もう一つは今も首都で政府が管理しているのだが、それを「実は黄金製で、日本人が略奪していった」などと誤解されていたのである。学界では今も高く評価されている研究だが、調査団と地元との関わりの薄い時期が 40 年以上も続き、情報の歪曲を招いたのだ。私は現在の東京大学教員であるため、当事者として改めて成果発信の手段を再考し、展示を企画したのである。パネルには 1963 年にペルー政府が調査団に「交差した手」をリマに移すよう指示した文書や、66 年に壁から切り出した「交差した手」を調査団が市に引き渡す式典の写真なども配してある。写っている人物の氏名を可能な限り調査して表記したり、今も地元で有名な団長・泉靖一が子供の怪我を手当てしている珍しい写真を加えたりとなど、見どころを凝縮してある（写真１）。

写真１　「ワヌコの記憶＠東京」（2016）とその部分
（東京大学の段ボール箱を組み立てるワヌコの作業員）
（写真下 提供：東京大学アンデス調査団）

これに先だって 2013 年より、UMUT の収蔵するオリジナルの石膏型から新規制作した一対の「交差した手」レプリカを、解説パネルとともにワヌコ大学博物館に「Historia de las Manos Cruzadas（交差した手の歴史）」として展示している（写真２）。

開幕式典は多くの市民で賑わったが、3 年あまり経ってみると、市外からの観光客はともかく、入館料

を払って町中の博物館に展示を見に行く市民は少なく、また博物館の開館状況も不安定なようで、誤った風説は依然聞こえてくる。その点、今回パネルを設置したコトシュ遺跡は、憩いの場として市民が集う場所であるし、私が 50 年ぶりに発掘したこともあって、市民やマスコミの関心も遺跡に向けられている。今後の経過に注目したい。

写真２「『交差した手』の歴史」（2012）

UMUT はモバイルミュージアムと銘打ったプロジェクトを、この 11 年間で 150 件以上重ねてきた。博物館標本を展示ユニットとしてパッケージし、小学校、空港、企業オフィスなど、さまざまな場所をミュージアム空間に変えていく。ペルーで実施してはとの提案を受けて 2012 年に、大貫良夫会員が館長を務めるクントゥル・ワシ博物館に専用の展示ケースを設置させていただいた。最初の展示品は先述の「交差した手」レプリカであった。60 年代当時に石膏で作ったレプリカはすでにあるが、私は石粉粘土（パジコ社アーチスタフォルモとラドールプルミエ）を使った。乾燥時の収縮が厄介だが、軽く丈夫に仕上がる。東京で作ってスーツケースで現地に運び、コーヒーに浸して染め、地元の家具職人に依頼した木製台座に取り付けて、「Las Manos Cruzadas（交差した手)」のタイトルで公開した。

翌 2013 年には「交差した手」をワヌコ市に移動し、残った UMUT の展示ケース用にクントゥル・ワシ遺跡の「Altorelieve de Serpiente（蛇のレリーフ)」を新造した。1997 年に出土したこの壁面レリーフは保存のため埋め戻されており、現物を知る村人も限られる。調査時に撮影されたレリーフの写真を複数合成しながら原寸大に引き延ばし、1cm 角のグリッドとともにプリントして、交点に垂直に爪楊枝を立て、それをガイドとして各グリッドに石粉粘土を盛っていく（写真３)。土を表現する部分は粗いサンドペーパーを押し当てて質感を出し、全体をコピック（アルコールマーカー）で彩色した。この成形と仕上げの方法はその後の制作においても応用している。

写真３　「蛇のレリーフ」（2013）**と制作過程**

なおクントゥル・ワシ博物館は私が学生の頃から学ばせていただいている場所でもあり、開館 20 周年の展示リニューアルに際しては、割れ口に沿った形の台座を自作して半完形土器を載せるなど協力させていただいた。洗面器やペットボトルを芯にして、現物を合わせながら粘土で作り、ビロードで覆っている（写真４)。土器は基本的に自重で台座に載っており、着脱可能である。割れた土器の内面を観察して成形痕を研究してきた経験から、土器の破損部を石膏などで塞ぐことなく、また博物館展示として効果的なディスプレイを私なりに追求した結果である。

写真４　クントゥル・ワシ博物館の土器台座（2014）

日本でも勤務先で展示ユニットを製作してきた。小石川分館に常設展示している 1/5 縮尺模型「クントゥル・ワシ神殿の大石彫」は、現地で現物を撮影し、それを原図として作り起こした。柱状の石の両面に獣人像を施した石彫だが、模型も両面それぞれを別々に成形していき、最後に貼り合わせて全体を仕上げている（写真５)。木製台座は着脱可能で、講演や展示イベントなどさまざまな会場に設営できる。2015 年の第 20 回研究大会・総会の関連行事「東大アンデス考古学のかたち」展でご記憶の方もおられ

るかと思う。

写真５「クントゥル・ワシの大石彫」（2015）**と制作過程**

2016 年に始まった常設展示「UMUT オープンラボ」には、「太陽系から人類、そして文明へ」という長い回廊展示があり、小惑星の模型に始まり、地球、生物、人類の標本が連なる。締めくくりの「文明」の担当者として、アンデス文明を象徴するモノとは神殿建築に他ならないと息巻いて、1/50 縮尺模型「コトシュ・ミト期の２つの神殿」を作った（写真６）。交差した手の神殿の上にニチットスの神殿が載った様子を半裁した、報告書の有名な図版をヒントにしている。平面図を 1/50 で印刷した上に、壁や床のレベルに合わせて段ボール片を積み上げ、壁面を石粉粘土でコートしていく。切断面の土層や石材も表現し、炉から溢れた灰の上に次の神殿が築かれる、というミト期の神殿更新の特徴を可視化した。石材は園芸用の砕石や拾った砂利、土層中の多量の河原石は粘土を丸めて着色したものである。交差した手の神殿の内壁には名の由来となったレリーフも再現してある。外壁が赤いという事実はあまり言及されてこなかったが、こうしてその姿を再現すると、セチン・バホやベンタロンなど、今世紀に日の目を見た数々の赤い先土器神殿との共通点を気づかされる。なおこの模型は 2017 年 10 月より「古代アンデス文明展」の展示物として各地を巡回する。可動的な展示ユニットとして作ったことが結果としてモバイル展開につながった。

写真６「コトシュ・ミト期の２つの神殿」（2016）
と制作過程

研究者による成果発信は書籍や講演など、言語ベースが基本であろう。しかし現地でも日本でも、専門性の高い考古学の成果を、一般市民に浸透させることはつねに難しい課題である。またかつて「大アンデス文明展」に感銘を受けてこの世界に入門した私のように、日本の考古ボーイ＆ガール（および成長後）が海外の古代文化に開眼する機会はミュージアムにある。文化財が国境を越えて日本の常設展示に加わる機会は今後ほとんど望めないが、新たなものに触れたいという需要はつねにある。3D スキャン・プリントなど、デジタル技術の普及と低価格化を待つのもよいが、今そこにある要請に応えるために、ミニマムでモバイルなミュージアムを自分の手で作ってしまうこともまた選択肢である。

註）冒頭のパネル展示以外の展示物は「コトシュ遺跡『交差した手』壁面レリーフ」（『ウロボロス』17/4、2012）、「２つの神殿、３つのかけら　東大アンデス考古学のかたち」（『ウロボロス』18/3、2013）「南米ペルーの博物館と考古学」（稲村哲也編『博物館展示論』、2015）「アンデス文明の黄金・織物・土器・建築」（矢後興一編『見る目が変わる博物館の楽しみ方』、2016）等の拙稿でも紹介している。

●ニカラグアでのコミュニティ･ミュージアムづくり

南博史（京都外国語大学教授
／国際文化資料館館長）

はじめに

博物館は誰のものだろうか。博物館に学芸員として長く働いてきたが、しばしば抱いてきた疑問である。博物館の設立者、たとえば市立博物館であれば市のものなのか。確かに土地も建物も、さらには博物館に収蔵されている資料も市のものであろう。また、館長のものか？小規模だけれど大学の付属博物館の館長であるが感じる疑問は今も同じ。

ここで取り上げた疑問「誰のもの」とは、「誰のため」にあるのかということである。国立博物館や公立博物館のような地方自治体であれば、国民のため市民のためにあるということになる。確かに日本の博物館法では、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関・・・（下線は筆者）」とある。

これを読めば博物館は誰のためにあるかは明確なはずだがなぜかしっくりこない。というか、実際の博物館の活動は、決して「一般公衆」を目的としていないことが多いからだ。これは博物館の中心に資料があって、資料に関する調査研究、資料の保存という活動が優先されているからである。「展示して一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資する目的」と必ずしも合致しない。価値の基準が異なるとみるべきだ。

ともすれば両者を天秤にかけて、どちらを優先するか？のような意見を聞くことが多い。とくに近年、博物館の活動が地域社会に拡大し、その社会的価値、経済的価値が評価されるようになったこともあって、博物館や学芸員が一方の価値判断からの批判の矢面に立つことが増えた。そのたびにもう一方の価値から反論する。しかし、これではいつまでたっても平行線である。

博物館や資料は、「わたしたち」のものである。一方、時間を超えて存在し続ける博物館や資料は、過去の「わたしたち」によるものであり、未来の「わたしたち」のものである。つまりは館長や学芸員は、一方の価値だけから反論するのではなく、博物館や資料が「わたしたち」のためにあることを学術的視点、博物館学的視点、教育的視点、社会的あるいは経済的視点から総合的に研究し、明らかにし、その普遍的価値を未来に引き継いでいく重要性を啓発する役割を果たすべきだ。

写真１　ラスベガス遺跡とキラグア山系　©P.M

コミュニティ・ミュージアム

京都外国語大学国際文化資料館ではこうした課題の解決にむけ、具体的な社会実験としてニカラグアでコミュニティ・ミュージアムづくりに向けた実践的な研究を実施している。

なお、ここでとりあげるコミュニティ・ミュージアムとは、地域住民が主体となって運営にあたる博物館のことである。コミュニティ・ミュージアムの目的は、あくまで地域住民、地域社会の課題解決にある。その活動も地域の歴史や文化だけでなく、今そこにある暮らし、生業、そして環境と切り離すことはできない。つまり、コミュニティ・ミュージアムづくりを通して、博物館や資料の普遍的価値、学芸員の役割を実践的に明らかにしていきたい。

プロジェクト・マティグアス

～ニカラグア共和国マタガルパ県マティグアス郡ティエラブランカ地区を中心とした考古学と博物館を仲介者とした実践的地域研究～

このプロジェクトの目的は、まずティエラブランカ村近くにあるラスベガス遺跡の中米地域の考古学における重要性を明らかにすることがある。そして、遺跡があるキラグア山系の西麓地域をフィールド・ミュージアムと見立て、先住民の文化財の博物館的活用を通して、当該地域が慢性的に抱える貧困、教育問題、環境問題などの解決を目指す。つまり持続的な開発と発展を可能とする具体的方法を地域住民と協働し、見つけることにある。

その具体的な社会実験として住民主体によるコミュニティ・ミュージアムづくりを目指す。

考古学調査の現状

2013 年、当該地域とその周辺の考古学調査を開始した。発掘調査の対象は、地所名フィンカ・ラスベガスで、約 30,000 ㎡の敷地に約 30 のマウンド（土盛遺構）が視認できた。さらに全長 4.5m の男根状に加工されたモノリート（石柱）が横たわっていることが大きな特徴である。

2014 年から発掘調査を開始した。マウンド中で比較的大型（直径約 20m、高さ約 2m）でモノリートとの位置関係、マウンド群の一番東北側でキラグア山系に面しているマウンド（mont.1）を対象とした。

2017 年までに 6 次の調査を実施し、この mont.1 が平面四角で三段以上の階段状の構造物であることが明らかになった。また、この建物が祭壇で頂部には主体部があることが確認できた。

また、調査地の測量調査によってマウンドの正確な配置と微地形が明らかになり、マウンドが 40 基、また mont.1 の西側には２基のモノリートがある広場と推測できる空間があることもわかった。

コミュニティ・ミュージアムづくりに向けた活動

2013 年の調査開始時点から、調査終了時には必ず地域住民を対象とした報告会と博物館活動を実施している。これには 2 つの目的がある。一つは、マティグアス市民やティエラブランカ地域住民への調査報告会および現地見学会を通して、先住民文化に対する理解を深める目的である。そして、もう一つは、住民の直接的利益に結び付ける活動拠点「コミュニティ・ミュージアム」づくりに向けた活動である。

具体的な方法としては、調査成果プレゼン、現地見学会、プロジェクトを紹介する写真展の開催、報告会参加者や住民へのアンケート調査を行っている。

写真２　ティエラブランカ村小学校での写真展　©P.M

写真３　コミュニティ・ミュージアムって何？　©P.M

アンケート調査にみる地域住民の意識変化

コミュニティ・ミュージアムづくりに関連したプレゼンとアンケート調査は、2015 年夏、2016 年と 2017 年の春の 3 回実施している。とくに 3 回目の調査では、ティエラブランカ地区住民へのワークショップ「コミュニティ・ミュージアムって何？」を開いた。これは調査に参加した 3 名の京都外国語大学スペイン語学科の学生が、「村の女の子」「考古学者」「学芸員」の役に分かれて、「コミュニティ・ミュージアム」を紙芝居仕立てに紹介したものである。

アンケートの結果、住民が主体となった「コミュニティ・ミュージアム」にむけて、「こどもたちのため」「自分たちの歴史を知るため」という意見が多く出た。また、それを観光に結び付け村を発展させていくなど住民自身の主体性を感じる回答が第 2 回目のアンケートに比べて増えた。こうした 3 年にわたる調査と博物館活動の結果、住民意識に変化が起こっていることが明らかになった。

おわりに

この報告会に参加したマティグアス市長は、2018 年度からコミュニティ・ミュージアム建設を始めると発表した。意外なことに地域住民は冷静にそれを受け止めた。この 3 年間に積み上げてきたプロジェクト側との信頼関係、ミュージアムについての基礎知識、また地域住民が主体になるという理解が一定広がっているからであろう。

もし、こうした活動を続けてこずにいきなり市長が村にミュージアムを作ると言ったら、きっと土地を取り上げられるとか、逆に自分たちに何をしてくれるのか、といった反応が出たのではないか。

プロジェクトの目的と方法が、少なくともここまでは正しかったことを確信した。

●地域博物館としての萌芽
ーコパンデジタル博物館の展示解説ー

五木田まきは
（金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程 3 年）

はじめに

ホンジュラス共和国コパン県コパンルイナス市は、UNESCO の世界文化遺産「コパンのマヤ遺跡」を有する世界的な観光地である。コパン遺跡は長年にわたり世界中の研究者によって調査され、市の中心部や遺跡近くにはそれらの成果ともいえる博物館が設立されている。

コパンデジタル博物館（以下、“デジタル博物館”と略記）は、日本のノン・プロジェクト見返り資金協力や日本企業のヴァーチャル・リアリティ(VR)技術を導入利用して、2015 年 12 月に開館したコパンルイナス市で最も新しい博物館である。街の中心である中央公園の北側に面した博物館の建物は、以前は公立の小学校であった市の所有する建物を改修したものであり、運営は国立人類学歴史学研究所が行っている。

デジタル博物館は同市に既に存在した博物館とは

異なり、コパンのマヤ遺跡だけではなくコミュニティの歴史も扱い、地元住民へ向けた地域博物館としての役割が期待されていることも大きな特徴として挙げられる。今回は、デジタル博物館と住民の関わりの事例から、当該館において地域博物館の萌芽が見え始めたことを紹介する。

展示内容

まず、2017 年 3 月の筆者滞在時の展示内容を展示室ごとに概観する。デジタル博物館は 5 つの展示室で構成されており、来館者は第 1 展示室から順番に時代を遡るように展示室を回る。

チケットを購入し第 1 展示室に入ると、右手に復元された 20 世紀初頭の市長の執務室が目に入る。中央の展示ケースには市民の出入国記録や航空券のチケットといった市役所所蔵の公文書が展示されている。壁面には 20 世紀のコミュニティの様々な場面を切り取った写真パネルの展示があり、当時の生活や服装など知ることができる。

第 2 展示室では、19 世紀にやってきた探検家や考古学者らの写真、遺跡と共に生きる人々の様子を知ることができる。

第 3 展示室に入ると中央には上面に地図が貼られた大きな台が姿を現す。これは、人々が生活する現在の市の中心部と遺跡の分布地図を重ねたもので、自分が立っているこの空間そのものが遺跡の上であるということを視覚的に認識できる。

第 4 展示室では、当該博物館の名前の由来ともなった VR 技術などを用いたデジタル展示を体験することができる。メインとなる展示は VR 映像であり、VR で正確に再現された現在のコパン遺跡の姿に加え、通常見ることのできない上空からの視点や一般公開されていない地下神殿、最新の研究成果に基づく往時のコパン中心部の姿などを西英日語による説明と合わせて見ることができる。また、コントローラーを用いて来館者が自由にコパン遺跡の VR を見て回れるディスプレイも設置されている。他にも、正確に記録されたデータに基づき 3D プリンターで出力された古代の石造彫刻やしっくいレリーフの他、様々な発掘隊による遺跡発掘の写真なども見ることができる。

最後の展示室は企画展示室である。開館第 1 号展示として、筆者起案による古代のゲーム「パトリ」の体験型展示が設けられている。ゲーム盤の分布や史料に基づく解説パネルに加え、再現された古代のゲーム盤やさいころを実際に手に取って遊ぶことができる。この企画展示室では、現在展示替えを予定しているほか、学生の海外実習の場としても活用される見込みである。

写真 1　デジタル博物館内観（筆者撮影）

住民との関わり

では、このような特徴と展示を持つ博物館にコミュニティの住民はどのように関わっているのか。ここに、地域博物館としての当該館の行く先を見ることができる。

まず、当該館にもっとも関わる住民は館で働くスタッフである。2017 年 3 月時点において、3 名が在籍し、曜日交代でチケット売り・清掃係と常時 2 名が勤務している。ここで特筆すべきは、チケット売りを行う 2 名である。2015 年 12 月の開館以来、来館者に対し任意で展示解説を行っている。これは、開館時のスタッフが独自に始めたものであるが、その後スタッフの入替を経ても前任者から後任者へと引き継がれている。コミュニティの歴史を扱うといっても、学校で習う内容ではないため、彼らは解説パネルを読んだり独自で調べるなどして情報を蓄積していった。開館以来 5 名のスタッフがこの職についたが、みなこの職に就くまで展示されているようなコミュニティの歴史を知らなかった。しかし、展示解説をすることを通して歴史や古代マヤについての理解が進み、自分の勤める博物館はもちろん、コミュニティや遺跡により親近感や愛着を持つようになったと語る。

しかし、多くの住民はスタッフではなく来館者として博物館を訪れる。筆者は、調査滞在中に興味深い瞬間に幾度も遭遇した。主に 20 世紀の資料を扱う第 1 展示室で見られたが、前述したスタッフが展示解説を行うと、来館者の方がさらに語り始めるのである。よく話を聞くと、写真に写っている人物が来館者の祖父や親戚であり、その人についての思い出

などをやや自慢げに滔々と話し出すのである。また、第３展示室の地図を見ながら、自分の家とその下や近所に何があったのか熱心に見入る姿も見かけた。長年数々の発掘調査に参加してきた住民は、第４展示室の壁面に展示された調査隊の集合写真などを見ながら、自分はここにいる、これは誰々など懐かしそうに目を細めながら話すのである。

こうした博物館となにかしら「つながり」を持つ住民にとって、当該館はただの「まちの博物館」ではなく「自分の博物館」として受け止められていることが見受けられた。

写真２　展示解説をするスタッフ（筆者撮影）

地域博物館としての萌芽

日本においては 70 年代後半から「地域博物館」なる概念に関する議論や設立が活発化した。博物館や文化遺産に関する国際的議論を見ても、「地域」や「市民参加」は 2000 年代以降の大きな流れとなっている。ここでいう地域博物館とは、「地域に生活する市民自身の自己学習能力を刺激し、育み、自分で自分の学習を発展させていく力量（自己教育力）の形成を図ることを課題としている」「地域の課題に、博物館機能をとおして、市民とともに応えていこうというのが地域博物館である」（伊藤　1993）とあるように、住民の能動的な学びを通して地域の課題を解決していこうとするものである。

この観点から振り返ると、スタッフの展示解説の事例は、博物館に勤務し前任者の展示解説に触れることで自己学習能力を刺激し、自ら歴史を学び調べ、今度は自分が展示解説することを通して自己教育力が育まれていっていると見ることができよう。

しかしながら、地域博物館の博物館機能をとおして地域課題に応える点や、住民が主体となり博物館設立や運営を行うコミュニティ博物館には至っていない。住民自身が地域課題を発見・認識し、博物館機能をとおしてその解決をはかるために、どのように展示や博物館運営に地域住民を巻き込んでいくかが今後の課題となるだろう。

おわりに

今回は、スタッフと来館者の 2 つの関わり方のうち、スタッフの展示解説のケースにおいては、地域博物館としての兆しが見えることを述べた。来館者として関わる大多数の住民にとっても、自己学習能力を刺激し、地域課題に取り組むことにつながるような展示や教育活動に今後は取り組んでいきたい。

引用・参考文献

伊藤寿朗 1993『市民のなかの博物館』吉川弘文館

●社会に認められる博物館へ
－地域・学校と博物館の連携－

村野正景（京都文化博物館）

京都は昨年、世界考古学会議(WAC)の４年に一度の大会をお迎えし、今度は 2019 年の国際博物館会議(ICOM)の開催を控えている。日程はもう決まっていて、9 月 1 日から 7 日まで。3 年に一度の世界大会とあって、大会の組織委員会などが様々な形で動き始めている。お隣りの中国や韓国では大会開催をきっかけに、博物館界がかなりの発展をみせた。日本でも、単なるイベント開催に終わらせぬよう、博物館界ひいては社会にメリットを生み出す工夫を凝らしているようだ。京都のまちなかに位置する京都文化博物館でも ICOM に協力し、30 ある国際委員会のいずれかをお迎えしようと準備が進められている。

ラテンアメリカではこの ICOM に、国によってばらつきはもちろんあるものの、ある意味日本以上に関係を持ってきた。例えば、自国の博物館法を持たない中米諸国は ICOM の博物館定義を採用しているし、大会開催実績を見てもメキシコ(1980 年)、アルゼンチン(1986 年)、ブラジル(2013 年)とすでに 3 回ホスト国となっている。さらに毎年 ICOM 国際委員会の何らかの会議はラテンアメリカ諸国で開催されており、例えば今年 10 月にはメキシコシティで都市博物館会議(CAMOC-ICOM)が ICOM Mexico や ENCRyM（メキシコ国立保存修復学・博物館学大学）の協力で開催され、筆者も出席予定である。

とりわけ近年では、ブラジル博物館界の活躍が目立つ。2015 年に UNESCO が ICOM と協力しながら博物館に対する新勧告を 55 年ぶりに採択したが、その起草はブラジルがイニシアチブをとった。そして

それを支援したのがラテンアメリカ諸国だった。この勧告では現代的な博物館像を提示しようと複数の項目が挙げられている。なかでも筆者の目を引いたのは、1972 年に採択されたサンティアゴ・デ・チレ宣言にある博物館の社会的役割が再度強調されていることであった。かつてチリの首都で実施されたこの会議に出席したラテンアメリカ諸国の博物館関係者は、エリートを主な顧客としコレクションを中心とした伝統的博物館像とは異なり、コミュニティの結束や地域振興のために地域で遺産を扱うという新博物館像に少なからぬ衝撃を受けたという。この理念は今も力を失っていないし、強調されてすらいる。

また採択に至る過程で、予備調査報告に対するブラジルのコメントも筆者の目を引いた。それは短文ながら、現状ラテンアメリカ等のかなりの数の博物館は公的法的制度があって作られたわけではなく、諸個人や様々な社会集団がアイデンティティや記憶を保護する目的で博物館的施設を作り、彼/彼女ら自身で運営していること、それは実際にコミュニティにとって記憶の家、知識のセンター、地域開発の基地となっていること、そして法的に規定された施設ではないけれども、むしろ「社会的に認められた施設」となっていることなどを表明した。この見解は、いわゆるコミュニティ博物館を想起すれば首肯しうるし、それ以外の博物館でも社会的であるべきと指摘されたようで改めて背筋を正される思いがする。

というのも、昨今の我が国の博物館をめぐる状況は、誤解を恐れずに単純化して言えば、入館者数第一主義の経済ないし観光のみが最優先という風潮があり、それで勧告にあるような博物館たりうるのか、少々困惑を覚えてしまう。ブラジルやメキシコのほうがある意味よっぽど進んでいると感じてしまうのは、隣の芝生が青く見えているだけだろうか。そんな戸惑いを乗り越えるべく、京都文化博物館では近年、博学社連携事業という博物館を核とする地域組織や学校との連携を進めている。例えば、博物館界隈の地域組織と月一回の定例会を持ち、地域と博物館それぞれの様々な課題を共有し、そのうちお互いがアプローチできそうな課題にターゲットを絞って博物館活動をおこなう。やや具体的には、地域の品格を考えその住民間共有を目指す地域組織に向き合い、博物館から歴史的情報を提供したり、一緒に住民インタビューをおこなったり、地域づくりの行動成果を展覧会にして普及したりといった活動である。

ほかにも、明治時代以降、京都のまちづくりの拠点となってきた学校について、その学校の「困った」ことを、学校と博物館と地域の連携で解決すべく、一緒に資料整理や調査をおこなう活動や、学校所蔵資料を活かした連携授業として展覧会を企画・実施する取組などをおこなっている。いずれも、出前講座や博物館見学受入れのような伝統的博物館活動とはやや異なり、今一歩お互いに踏み込んだ連携活動を進めている。学校に博物館が関与したきっかけの一つは、学校で保管してきた資料が現在十分に活用されず箱にしまわれていたり、それが何か教えて欲しいと要望されたりといった「学校資料」の保存・活用をめぐる課題に学芸的・博物館的関与が意味を持つと考えたからである。なお学校資料は、学校が社会科等授業用に揃えたもの、地域住民や卒業生の寄贈品、校地内出土品など来歴は多様であり、そもそも学校は特有の資料が生成・構築される場である。そのため、こうした資料の保存・活用は、学校や教育の歴史ひいては地域の記憶を継承し、今に活かすことにつながってくる。

プライバシーや肖像権の保護に配慮し、
ウェブサイト版では割愛いたします。

写真１　博物館と学校の連携授業の様子（於：京都文化博物館 2015 年 撮影：京都府立鴨沂高等学校）

そんな学校資料を多様な形で活用する取組は、近年日本各地でみられ、いくつかモデルとなる事例も出始めている。その一つとして横浜市の「博物館デビュー支援事業」は興味深い。同市歴史博物館が始めた取組では、埃をかぶっていた資料を地域住民との共働によって整理し、博物館が資料の取り扱いの専門的知識や情報を供しながら、小学校の空き教室などを利用して、そこに資料を保管・展示できる「学校内歴史資料室」を設置する。その場は、授業の地域学習に用いられ、また地域の人々も協力しやすい課外授業ひいては学校教員・生徒と地域交流の場になり、さらには地域連帯のきっかけともなっている。この学校内歴史資料室に学芸員はおらず、法的な意味の博物館ではない。しかしこれは、社会的に認め

られた施設としての博物館の、日本での貴重な事例と言えるだろう。筆者らが大学博物館・コレクション国際委員会(UMAC-ICOM)で当館の事業と共に横浜の事例を紹介したところ、新たな取組として良い反響を得た。その意味で、安易に言うつもりは決してないものの、ラテンアメリカ諸国でもこのモデルは将来的になにかしら応用可能なのではないか。

もちろん、そんなモデルや理論を云々するだけではなく、今できる実践を行う必要もある。筆者がフィールドとするエルサルバドルでは、遺跡・博物館訪問経験を持つのは国民の所得上の上流・中流階層で約 39%、下流階層は 17%ほどにすぎないという。また学校の遠足で遺跡訪問をする学校があっても、博物館をつかいこなす教員はまれである。博物館が社会的に認められているとは少々言い難い。

そこで筆者らは、同国チャルチュアパ市の遺跡公園博物館で、陶芸家と共に古代の土器の復元実験を公開でおこなったり、学校教員と生徒を招いて写生大会を実施したりと、一種の教育・娯楽に係る催事を実施した。日本の学校資料も同じかもしれないが、普段目にしていながら気にとめていなかったものにでも、それへアプローチできる具体的視点を与えると生徒達あるいは教員にも見えてくるものがあるようだ。また催事を単発ではなく、事前学習と事後評価も含めた発展的活動の仕組みがあると、より生徒も教員も資料への関心は高まるようだ。この写生大会の後、学校から、生徒が自発的に遺跡の絵や模型作りを学校でおこない、多くの人たちに見てもらおうとしており、先生たちも驚いていると連絡があった。感受性の高い若い世代からの嬉しい反応であり、博学連携の意義あることを示している。もちろん、教育目的に利用されるだけが、社会的に認められる道ではない。実際、エルサルバドルのような治安に問題がある国では、大型ショッピンモールと遺跡公園・博物館は比較的安全な場所と考えられており、そのような意味でも、存在意義を持っている。

エルサルバドルは、ILAM(ラテンアメリカ博物館・公園研究所)によればメキシコ・中米 7 カ国の中で人口当たりの博物館数が下から 2 番目である。しかし、遺跡近くの学校にコミュニティが展示施設を設け、出土品を考古学者と協力しながら展示したバホ・レンパ地域のヌエバ・エスペランサ遺跡のような優れた経験も持つ。上記の国際宣言以降、コミュニティ博物館がメキシコをはじめ多くの国々で設置されており、こうした活動は将来的に学校との連携でよりよい形になるのではないか。その意味で、日本とエルサルバドル等をつなぐモデルとして、学校内歴史資料室の動向を今後も実践的に研究したいと考えている。

プライバシーや肖像権の保護に配慮し、
ウェブサイト版では割愛いたします。

写真２　博物館展示室での写生大会（於：タスマル遺跡公園博物館、エルサルバドル 2007 年 撮影：村野正景）

プライバシーや肖像権の保護に配慮し、
ウェブサイト版では割愛いたします。

写真３　小学校での遺跡模型作り･絵描（於：アユティカ小学校､エルサルバドル 2007 年 撮影:アユティカ小学校）

参考文献
京都文化博物館地域共働事業実行委員会 2016『学校と考古学』

●野外博物館としての先スペイン期遺跡
ーメキシコの遺跡公開における博物館学およびミュゼオグラフィー（博物館技術）応用による可能性ー

渡辺裕木（筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻博士後期３年）

メキシコの遺跡は博物館ではない？！

メキシコ国内の遺跡管理における最高機関であるメキシコ国立人類学歴史学研究所（以下、INAH）によれば、メキシコ合衆国の領土には先スペイン期の

遺跡が20万件以上存在し、現在約2万9千件がINAHのリストに登録されている。また、その内181件が、INAHの管理下で一般に公開されている[1]。公開された遺跡は、ICOM（国際博物館会議）の第22回総会（2007年）で承認された規約[2]第3条の博物館の定義に完全に合致する「野外博物館」である。

しかしメキシコでは、博物館がINAHの国立博物館及び展示関係管理局(Coordinación Nacional de Museos y Exposiciones)に管理されているのに対し、遺跡は、同じINAHの国立考古学局遺跡運営執行部(Dirección de Operación de Sitios de la Coordinación Nacional de Arqueología)の管理下に置かれている。つまり遺跡は博物館と一線を画し、端的に言えば「博物館ではないもの」として管理されていることになる。遺跡に併設する遺跡博物館(Museo de Sitio)は「博物館」として管理されるため、通常遺跡とは個別に運営されている（入場料は一括徴収）。

このような状況で、一般公開されている遺跡について、博物館学的あるいはミュゼオグラフィー（博物館技術）的視点から分析した先行研究は非常に少ない。ただ、メキシコ市中心部にあるテンプロ・マヨール遺跡は国内唯一の例外で、「テンプロ・マヨール博物館(Museo del Templo Mayor)」の一部として、博物館と共通で運営されているため、同遺跡では、「体系的に」とは言い難いものの、博物館学的研究が断続的に行われてきた。

一般公開された遺跡の特徴と活用

メキシコでは1821年の独立以降、先スペイン期文化遺産への学術的な関心が高まり、19世紀後半、レフォルマ期からポルフィリアート期にかけて、遺跡調査が盛んに行われるようになった。独立国家としての成熟を目指すメキシコにとって、スペインと起源を共有しない先スペイン期文化は、国民統合のイデオロギー形成に資する政治的利益をもたらす要素と捉えられ、ポルフィリアート期、また20世紀初頭のメキシコ革命以降、数々の大規模な発掘調査が国家事業として企画された。遺跡調査の開始とほぼ同時期に、遺跡や遺構の保護にも関心が持たれるようになり、考古遺産の保存に関する批判的・科学的理論が発展した。

現在一般公開されているメキシコの遺跡は、UNESCOの世界遺産リストに登録された遺跡だけでも10件以上（構成資産としての登録も含む）に及ぶなど、世界的に知名度の高いものも多く、国の重要な観光資源である。チチェン・イッツァ遺跡のエル・カスティーヨ(El Castillo)など一部の遺構は、メキシコに関する書籍やポスターにイメージ画像として繰り返し使用されてきたが、これは、国内外の多くの人々が、遺跡をメキシコの国家的イメージとして、意識的あるいは無意識的に認識するようになった一つの要因だと考えられる。つまり遺跡は、メキシコにとって経済的価値や象徴的価値[3]の高い考古遺産であり、その管理や運営に対して、施政者の政治的思惑が影響する可能性も推測できる[4]。

一般公開された多くの遺跡では、公開開始後も考古学的調査が続けられ、そこで得られる知見は、一般向け考古学専門誌Arqueología Mexicana（1993年創刊）や、文化省(Secretaría de Cultura)が運営する公共放送(Canal 22)などを媒体として、常に国民に向けて発信されていることから、遺跡の学術的価値[5]が遺跡活用の動機として、順当に評価されていると考える事ができる。

遺跡の文化普及・文化教育施設としての問題点

しかし、いざ一般公開されている遺跡を訪れてみると、その空間や、目の前にある遺構を見学者に理解させるための工夫が十分ではない事を痛感する。遺跡の一般公開の重要な目的は、遺跡や遺構の展示を通して、見学者が過去の時代について学ぶ事であるが、先スペイン期の遺跡や遺構が発信する情報を、専門的な知識を持たない見学者が正しく理解するためには、適切な整備が必要である。

メキシコ国内の遺跡では、ガイドの同伴なしに見学をする場合、現地に設置された解説パネルが唯一の無料の情報源である事が多いが[6]、これらの解説パネルのスペイン語のテキスト[7]には、考古学、人類学、建築学などで使われる専門用語や、先住民言語から派生した単語など、日常生活においては耳なじみのない言葉が多用されており、また、多くの遺跡が気候の厳しい地域にあるにも関わらず、野外で読むにはテキストの量が多い印象がある（写真1）。

実際、筆者がテンプロ・マヨール遺跡で2012年12月に博物館学的調査の一環として実施した、解説パネルの利用状況を知るための、遺跡見学者を対象とするアンケート調査の結果から、多くの見学者が日差しの強い時間帯には落ち着いて解説パネルを読んでいられないと感じている事や、専門用語を使ったテキストが分かりづらく感じている事が分かった。

また、パネルの設置場所や向きが適切ではないため、解説されている遺構が、見学者の立ち位置から特定しづらい事、掲載された画像資料も、専門家が調査で使う遺跡図など、一般向けには適切とは言えないものが散見されるなどの問題点が見つかった。

写真１　文字数が多く専門書の文章をそのまま転用したかのような解説パネルの例（ラブナ遺跡 ユカタン州 筆者撮影）

この調査では、多少でも専門的知識を持つ者には非常にシンプルに見える遺構でも、遺構を見慣れない人々にとっては簡単に理解できるものではない事が分かった。必要なのは、遺構と遺構を観察する多様な人々とのコミュニケーションを手助けできるツールを提供する事である。パキメ遺跡（チワワ州）では、モバイルアプリケーションを使ったガイドサービスが 2016 年 1 月に始まるなど、新しい技術を使った開発も各所で進められてはいる。しかし、遺跡を「博物館」として再認識したうえで、既に蓄積のある博物館学的知見の中から、それぞれの遺跡の環境に適した理念や技術を見つけ出して応用し、「遺跡博物館」として体系化していく事も、一つの有益な可能性ではないだろうか。

おわりに

遺跡が有効な文化普及および教育の為の施設であるためには、専門的な情報（知見）を、より多くの様々な立場の見学者に適切に伝え、見学を楽しんでもらう事が必要である。本稿を通し、博物館学的視点の導入と、遺跡解説ツールの見直しを提言したい。

不特定多数の人々に遺跡を散策させる一般公開は、その意義の大きさと必要性を承知のうえで、非常に乱暴な言い方をすると、遺跡自体を日々破壊し続ける行為である。そのようなリスクを冒して公開を続ける限り、その状況を最大限有効に利用する努力を続けていくべきだと考える。

註

1）　INAH ホームページ
<http://www.inah.gob.mx/es/quienes-somos>

2）　イコム規約（2007 年 8 月改訂）
<https://www.j-muse.or.jp/icom/ja/pdf/ICOM_regulations.pdf>

3）　象徴的価値とは、考古学遺産の「地域的あるいは国家的軸」としての価値であり、遺産がある特定の人種、地域、文化あるいは国家のアイデンティティーを象徴する意味を持ち、そのシンボルとして存在する場合に認められる。［Gándara Vázquez, Manuel. 2001. *Aspectos sociales de la interfaz con el usuario: una aplicación a museos*. Tesis doctoral en Diseño y Nuevas Tecnologías de la Universidad Autónoma Metropolitana-Unidad Azcapotzalco, Ciudad de México.p.18］

4）　経済的、象徴的、および学術的価値については、メキシコの遺跡の管理・運営の方向性を総合的に理解するために重要な特徴であるが、これについて論拠を示す事が本稿の目的ではないので、仮説として言及するに留める。

5）　人類発展の経緯における極めて重要な事項の傑出した証拠であり、学術的な研究の対象や、教材になり得る特徴を備えた遺産に認められる価値。Gándara は学術的価値を、遺跡活用に際して必ず中心に考えなければならない価値であると定義している。［Gándara 2001: 18］

6）　一部の遺跡では、音声ガイド端末を有料で貸し出している。

7）　解説パネルには通常、遺跡訪問者の多様性への考慮と、おそらく先住民族文化保全の見地から、スペイン語、英語、遺跡のある地域の先住民言語、3 言語のテキストが併記されている。本稿は、筆者がテンプロ・マヨール遺跡で実施したアンケート調査の結果を参考に執筆したため、同調査で研究対象としたスペイン語版のテキストに限定して言及している。

●博物館展示の調査技術
ー私的ヴァーチャル・ミュージアムの構築方法ー

鈴木紀（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）

私は現在、科研費・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」の一環として、古代アメリカ文明や現在の中南米の先住民族文化に関する博物館展示の比較研究をおこなっている。とくに古代アメリカ文明と現在の先住民族文化の関係を、博物館の展示場でどのように伝えるかという点に関心をもっている。そのための調査は、メソアメリカとアンデス地域の先スペイン期文明に関する展示を有する博物館を訪問し、その展示の構成や内容に関するデータを収集することである。こうした博物館（美術館も含む）は、メキシコとペルーに多く存在するが、それ以外の中南米諸国にもみられる。また比較の視野を広げるため、北米や西欧にある、いわゆるユニバーサル・ミュージアムと呼ばれる世界の文化を展示する大型の博物館も対象としている。本稿では、この

研究の実施中に気づいた調査の技術的な工夫について述べたい。

博物館展示を分析するための鍵となる概念は「表象」である。文明や文化という抽象的な概念を、博物館では展示物、パネルやキャプションの言葉、そして写真や動画で表象する。来館者が古代文明の意味を読み解く手掛かりになるという点では、展示場の構成、順路、博物館の内装、外観も表象の手段として無視できない。こうした情報をデータとして記録するためには、言うまでもなくカメラとノートが必須である。

写真１：メソアメリカの石彫を展示するメキシコ市のアナワカリ美術館。重厚な石造建築はメソアメリカ文明の神殿を思わせる。（2016 年 7 月、筆者撮影）

写真２：米国メトロポリタン美術館の先コロンビア美術室。まばゆい貴金属製品の集合展示はエルドラドのイメージか。（2014 年 12 月、筆者撮影）

幸い、現在、多くの博物館ではフラッシュや三脚を使わない限り、写真撮影を許可している。個々の展示物や、それに関する文字情報はデジタルカメラで記録すると便利である。その際、なるべく展示物とそのキャプションを１対１に対応させて連続して撮影しておくと、後の情報整理が楽である。

カメラは使い慣れたものを使用すればよいが、私の好みは、ファインダーで画像を確認しながら撮影できる一眼レフカメラ（ミラーレスでも可）である。至近距離から展示ケース全体を撮影できるように 24 ミリ（35 ミリカメラ換算）の広角までカバーするズームレンズもほしい。フラッシュは原則的に使用できないことを想定し、F2.8 程度の明るいレンズが望ましい。私の調査では、１つの博物館で高画質の画像を 1000 枚以上撮影することもあるので、記憶媒体の SD カードは 64GB 以上を使用している。また忘れてならないのは予備のバッテリーである。半日も撮影を続けていれば、バッテリーはほぼ消耗してしまう。充電済みのバッテリーを携行していれば、不安はない。ガラスケースの中の展示物を撮影する際に、照明や窓の明かりの写り込みが気になる時には、PL（偏光）フィルターを使用すると効果がある場合がある。

ノートが活躍するのは、展示室の構成を記録するためである。部屋の形を描き、どこにどんなコーナーがあるかを簡単な平面図に記録しておく。さらに主要な展示物や、パネルのメッセージの概要を書き込んでおくと、後で展示室のイメージを思いだすのに重宝する。

もちろん博物館によっては写真撮影を禁止している場合もある。例えば、ペルーのクスコ市の博物館はほぼどこも撮影禁止である。しかしその場合にも、いくつか対処法がある。

写真３：クスコ市のインカ博物館のパンフレット。同博物館は撮影禁止だが、パンフレットから展示場の順路と、展示の構造がわかる。（2017 年 5 月、筆者撮影）

まず、学術研究が目的であることを説明し、撮影を許可してもらえるよう交渉すべきである。場合によっては有料で撮影許可が下りることもある。それでも撮影が不可の場合は、ノートをとりながら展示場を見学することになる。私の経験では、この方がかえって集中して展示を見るので、結果的に、展示の内容をよりよく理解できるようである。先述した

通り、展示室ごとに平面図を描き、それに展示物や解説の内容を細かく書き込んでいく。また、博物館の展示ガイドやパンフレットがある場合は、それらを入手し、ノートの記録を補完することができる。ただし、見学の最初からこうした資料を手にいれることは勧められない。少し安心してしまい、集中力が落ちるからである。ガイドと展示の制作時期が異なると、両者が一致していないこともある。

撮影禁止の博物館であっても、来館者の中には、スマホ等で撮影する者もいる。特に外国人観光客は、禁止のルールを知ってか知らずか、気に入った展示物を堂々と撮影することがあるようだ。もちろん見つかれば、係員に注意されるのだが、それが原因でカメラを没収されるようなことはまずない。こうした人々を目にすると、私もルール違反の誘惑にかられるが、学術目的であるからこそ、撮影禁止のルールは厳守したい。撮影禁止には、資料の保存や著作権の保護など、それなりの理由があるからだ。ただし無断撮影した写真がSNS等のメディアに掲載されている場合には、利用価値がある。当然、そうした写真を資料として論文に掲載することは不可だが、展示室の雰囲気を思い出す程度に閲覧することは許容範囲ではないだろうか。

写真４：筆者の撮影機材（デジタルカメラ、PL フィルター、予備バッテリー）

博物館での調査を終えて、早急にすべきなのはパソコンに撮影データのバックアップを取ることである。外国での調査の場合、帰国時にカメラを紛失したり、故障したりすることもある。また SD カードなどの記憶メディアも、突然、読み出しができなくなるというトラブルは珍しくない。資料整理の一環で便利なのは、画像ファイルに写っている文字をテキストに変換するOCRソフトである。私は、フリーソフトのPDF OCR Xを使用しているが、日・英・スペイン語に対応し、博物館のパネル解説の文章を写真から読み取ってくれる。ただし写っている文字の大きさや傾き、画質などにより文字の認識率はかなり変化するため、人の目による確認が欠かせない。

以上の調査技術を用いた後、最後は自分の頭で博物館展示を「表象」として読み解かねばならない。私の場合は、博物館見学中に、展示の「ツボ」、すなわち目立たないが重要なポイント、を感じることが多い。そうした第一印象を一つの仮説として保持しつつ、収集した展示物の写真と解説の文章を冷静に見直すことで、展示の意味を考えていくことになる。したがって博物館展示の研究といえども、実際の分析は研究室のパソコンの前でおこなうことになる。言い換えれば、私流の博物館展示の研究とは、自分のパソコンの中に古代アメリカ文明を展示するヴァーチャルな博物館を次々と建設し、研究課題に応じて、その回廊を周遊することである。本稿では、その建設作業のための基礎的技術を紹介した。

●京都市文化財保護課における普及啓発活動

馬瀬智光（京都市文化財保護課）

はじめに

京都市内には、全国の国宝の約 19%、重要文化財の約 14%が所在する。また、2016 年時点で、法的規制を受ける周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）805 箇所と史跡・名勝・天然記念物 207 箇所がある。京都市の遺跡の特徴は、平安京跡（23.4 ㎢）と長岡京跡（22.8 ㎢）という二つの都城跡に加え、伏見城跡（4.8 ㎢）、上京遺跡（1.8 ㎢）、白河街区跡（1.5 ㎢）、植物園北遺跡（1.5 ㎢）、鳥羽離宮跡（1.1 ㎢）などの 1 ㎢を超える大規模遺跡が複数存在することである。

筆者が所属する京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「市保護課」という）は，これらの文化財に対する現状変更や・開発・建築計画への対処で忙殺されており、普及啓発の大半を外部機関に任せている。

市保護課の組織構成を見ると、埋蔵文化財，記念物，建造物，美術工芸・民俗文化財，無形文化遺産，管理の７係がある。埋蔵文化財は技師系係長 1 名，文化財保護技師 8 名，記念物は技師系係長 1 名，文化財保護技師 3 名に技師相当の事務職 1 名，建造物は技師系係長 1 名に文化財保護技師 3 名，民俗・美術工芸は技師系係長 1 名に文化財保護技師 3 名が所属している。他に文化財保護課から京都市歴史資料館に技師系係長 1 名，学芸員 7 名（正職 2 名＋嘱託 5 名），元離宮二条城事務所に技師系課長 1 名，文化

財保護技師 3 名が派遣されている。

埋蔵文化財の職員は他都市と比較して多いとはいえないが，埋蔵文化財以外の技師がこれほどいる自治体は珍しい。ちなみに記念物担当の係長と史跡担当は埋蔵文化財出身であり，民俗・美術工芸の係長も埋蔵文化財出身である。

市保護課が所管する普及啓発施設は，京都市考古資料館，京都市歴史資料館，京都市伏見水垂収蔵庫，京都市建造物研修センターがあるが，歴史資料館を除き，外郭団体等が管理しており，直営で普及啓発している施設は少ない。

筆者は埋蔵文化財を担当していることから、主に関わっているのは埋蔵文化財の直営事業及び考古資料館事業であり，以下で，近年の活動内容を述べていく。

発掘調査現地説明会の開催

京都市は，平成 26 年（2014）にそれまでの行政指導と試掘・確認調査主体から，直営による発掘調査及び詳細分布調査を加えた体制に大幅な変更を行った。その結果，外郭団体まかせや，民間調査団体まかせではなく，自前で普及啓発活動を行うことになった。その中でも，一度に多くの人達に文化財の情報を伝える場として，発掘調査現地説明会がある。市内で発掘する他団体の調査と異なり、直営調査は重要遺跡が多いことから、調査面積が小規模であっても可能な限り現地説明会を実施している。

写真 1 伏見筑前台町地元向け説明会（伏見城前田屋敷跡）

広報発表・記者レクを行う大規模な現地説明会の開催だけでなく、地元住民向けの現地説明会も開催している。見学者はかなり不便な場所でも 200 名近く集まる。地元住民向け説明会でも 50 名～100 名近い出席があり、可能な限り近くで遺跡を見てもらうようにしている。安全であれば調査現場に降りて、直接遺構に触れてもらい、特別な保存処理を施さなければならない遺物を除き、自由に触れてもらうようにしている。もちろん写真撮影に制約は設けていない。また、現地説明会資料は当日現地で配布するほか、PDF 形式で高精細バージョンとモバイル版の 2 種類を市保護課 HP からダウンロードできるようにしている。

地域・区役所との連携による普及活動

京都市の南部、伏見区には豊臣秀吉の築城した伏見城天守を模した桃山城模擬天守が存在する。近年、普段使用されていないこの模擬天守を利用した「伏見お城まつり」が地域振興を担う地元の方々によって開催されており、その実行委員会からの協力要請を受けて伏見の文化財の普及啓発活動をしている。写真２は、普段一般の方が目にすることのない発掘調査で検出された伏見城（指月城）の堀の断面模式図を実物大で出力し、桃山城の玄関空間に展示したものである。見学者は 2 千人を超える大規模なものであり、金箔瓦や手に触れてもらえる遺物を揃えて展示解説するほか、歴史資料館の職員が伏見城を中心とした伏見の古絵図の列品解説を行っている。

写真２ お城まつり実物大の堀パネル（指月城跡）

写真３ 区役所子供向け事業 2015 年（芝古墳）

また、文化財の普及啓発において、日本で最も問題となっていることは若年層が参加しないことである。2015 年より毎年 2 ないし 3 の区役所と連携し、小学生高学年と保護者を対象とした文化財に親しむ場を設けている。市保護課の発掘現場を利用した体験発掘や、古墳巡りツアー、事業の委託先である公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所による火おこし体験、伏見人形の絵付け、勾玉づくりなどを行っている。

京都市文化財ブックスの発行

京都市では、市内にある多様な文化財の理解を進めるために通常の文化財啓発とは全く異なる視点で 1986 年度から「京都市文化財ブックス」を作成、出版している。年度によっては複数の担当者が合同で作成することもあるが、基本的には一人の文化財保護技師が自らの発案によりテーマ設定し、執筆・編集を行う。1986 年 10 月発行の第 1 集『京都の木～歴史のなかの巨樹名木～』から、2017 年 3 月発行の第 31 集『天下人の城』に至っている。

写真 4　ブックス集合写真

筆者は、単独で第 20 集『京の城』と第 31 集『天下人の城』を執筆・編集し、第 16 集『遺跡からみた京都の歴史』と第 22 集『杣（そま）の国』を共同で執筆している。課内での勉強会で内容の検討は行うが、基本的に題材や執筆内容についての過度な干渉はせず、文化財保護技師の主体性に任せられている。それ故、近代仏堂や剣鉾などの従来の文化財的価値とは異なる新しい視点から描き出したものや、一枚一枚の写真から京都の庶民の生活を描き出していくもの、筆者が執筆した城のように、京都に全国でもまれに見るほど多くのしかも大規模な城があることを初めて知ったと言われるものもある。

合同企画展

全国的にも異色の展示企画として、京都市考古資料館では、市内の大学などと連携した合同企画展を 2011 年から始めている。考古資料館の入館者数は毎年 2 万～2 万 8 千人の間で推移している。この企画展示においては、大学生や高校生が展示遺物の選定に係る資料調査、展示企画、パネルやポスター、パンフレットの作成、展示そのものを主体的に行い、授業の合間を縫って列品解説や体験授業を行っている。京都市考古資料館の学芸員や京都市文化財保護課の文化財保護技師の関与は最低限にとどめ、彼らの想像力で考古資料館の特別展示室という空間を用いることに意義がある。この合同企画展で興味深かったのは、高校生が展示した際に、高校生の両親だけでなく、高校の地元住民が熱心に訪れて、解説する高校生に質問する姿が見られたことである。以下に、過年度のタイトルと連携者を示す。

2011 年度　立命館大学
「はじめまして考古学－大学で学ぶ発掘－」
2012 年度　京都橘大学・立命館大学
「京都考古学探検隊－開け！過去の扉－」
2013 年度　京都府立洛東高等学校
「高校生が歩いて学んだ山科」
2014 年度　関西学生考古学研究会
「ここまでわかる!考古学－学生が見せる最先端－」
2015 年度　京都造形芸術大学
「身・食・祭－古都京都の縄文ライフ－」
2016 年度　龍谷大学付属平安中・高等学校
「HEIAN 掘る！」

おわりに

市保護課は、普及啓発を直営で始めてまだ日が浅い。埋蔵文化財以外では、筆者が建造物担当の係長であった頃から続いているが、文化財マネージャー育成制度がある。1 年を通じて建造物の見方、調査法などを学び、修了試験として課題の建造物の調査と利活用計画を発表する。彼らの一部は、国登録文化財への意見具申の題材となる調書の作成に携わる人たちも出てきている。しかも彼らの過半が普段は古い建物を解体し、新しい建物を創造する現役の建築士であり、この制度を通じて文化財の魅力を発信してくれている。文化財は保護するだけでなく利活用の重要性が言われているが、押し付けではなく、市民や文化財に興味を持つ人たちが自発的に取り組める、もしくは興味を引く普及啓発が重要と考える。

●『古代メソアメリカ周縁史－大都市の盛衰と大噴火のはざまで－』（渓水社、2017 年 2 月刊、6000 円＋税）

市川彰（名古屋大学高等研究院・人文学研究科）

本書は、2014 年 9 月に名古屋大学に学位請求論文として提出した『メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究』を基にしている。博士論文は II 部構成をなし、第 II 部に加筆修正したうえ、新稿を加えたものが本書である。第 I 部は、メソアメリカ各地の先古典期から古典期までの墓を集成し、そこからメソアメリカ各地における社会階層化の過程の相異について解明を試みたものである（会誌 15 号掲載の市川 2012 を参照）。

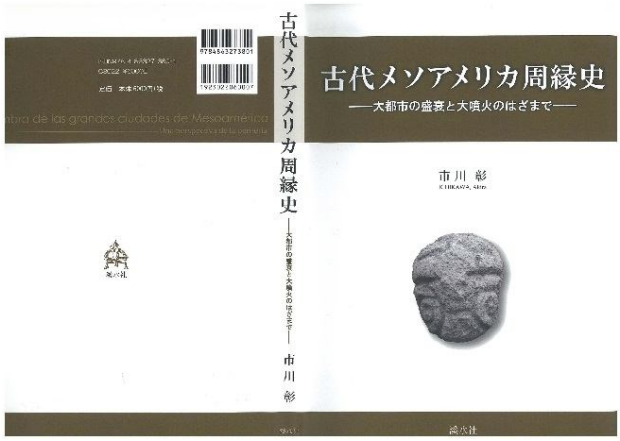

写真 1　表紙と裏表紙カバー

これから博論を提出される学生諸氏には酷な話だが、博論提出だけでも苦痛（もちろん発掘調査や研究は楽しいことが多い）がともなうというのに、そこから出版するまでにはさらなる苦痛がともなうと聞いた覚えがあった。提出から出版までの時間があけばあくほど、その苦痛は増すという。当然、苦痛は軽減したい。博論の構想段階から頭の片隅に「出版」を視野にいれて構成を考えるようにした。

2014 年 12 月に無事に学位が授与され、2015 年 4 月から幸運にも筆者は現職につくことができた。そこから、出版社探し、出版助成の申請書の作成などをおこなった。この段階の情報は、ほとんど持ち合わせておらず、出版関係の知人や指導教官から情報を提供していただき進めていった。幸いにして、2016 年 4 月に日本学術振興会科学研究費「研究成果公開促進費・学術図書」に採択され、出版資金の目途がたった。申請書を書いていた 2015 年は、エルサルバドル・日本外交樹立 80 周年を迎え、エルサルバドル文化庁長官が来日、眞子内親王がエルサルバドルを公式訪問し、ホヤ・デ・セレン遺跡を見学された年でもあった。これらが採択の追い風になったかどうかは定かでないが、ご縁を感じたのであった。

資金の確保が終わりではない。そこから出版社との打ち合わせ、校正、索引づくりなどが待っている。校正は、論文のように 20 頁ほどを 1 回ないし 2 回校正ならまだしも、200 頁を超えると確かに苦痛（少なくとも筆者には）である。出版社の担当者、先輩後輩諸氏、学生らの協力もあって、なんとか 2017 年 2 月に刊行することができた。それでも読みにくさが残るのは、全て筆者の不徳のいたすところである。

さて、本書の内容にうつろう。本書は、主に筆者が 2003 年から 2013 年までエルサルバドルで関わった現地調査で獲得した一次資料に基づいている。

本書の構成は以下の通りである。

序　章　古代メソアメリカ文明研究の動向
第１章　メソアメリカ周縁史研究の視座
　　-周縁からの挑戦-
第２章　歴史の連続性
　　-チャルチュアパ遺跡編年の再考-
第３章　噴火災害との対峙
　　-イロパンゴ火山噴火をめぐる諸問題-
第４章　先古典期から古典期への胎動
　　-社会変化の画期-
第５章　周縁と中心が接触する時
　　-周縁の主体性と独自性-
終　章　メソアメリカ周縁社会の特質

本書のねらいは、社会的文化的に遅れた存在、いわゆる「周縁」と位置づけられてきた地域や社会における集団や個人の主体性・独自性に焦点をあて、周縁研究を糸口として古代メソアメリカ文明史の新たな側面の理解に貢献することである。

序章・第 1 章では、メソアメリカの自然環境や通史を概観した後、考古学史を紐解き、周縁地域・社会の研究の必要性を解く。本書では、メソアメリカ南東部、とりわけチャルチュアパ遺跡における先古典期から古典期への社会変化の諸様相を対象として論を進めることを明示する。

第 2 章では、通時的研究の根幹となるチャルチュアパ遺跡の変遷過程を、建造物、炭素 14 年代、土器のデータをもとに論じている。前述したように本書は 2013 年までのデータに依拠している。2013 年から出版までの間には、マヤ南部地域を代表するカミナルフユ遺跡編年が再考された。また、チャルチュア

パ遺跡の調査も進展し、筆者自身も新たなデータを蓄積した。これらを十分に反映させることができなかった。とはいえ、ほとんど大きな衰退を経験することなく連綿と継続されるチャルチュアパにおける建築活動や土器製作といった社会活動を明らかにした点は本書の重要な成果である。

第３章では、新大陸では完新世最大規模と評されるイロパンゴ火山噴火をめぐる諸問題を扱い、噴火による社会変化の有無について論じている。近年、巷では、噴火は後 535 年に発生し、火口から半径 100km 圏内の社会は壊滅的影響を受け、マヤ低地の諸センターも一時的に衰退したとする説が急速に受け入れられつつある。センセーショナルな説は魅力的であろうが、もう少しデータをしっかり見てほしいというのが筆者の切なる願いである。考古学データは上述の説を支持しない。火口から半径 40km 圏外では、被害は想定よりも小さく、建築活動も土器伝統も継続するのである。

第４・５章では、先古典期から古典期への移行期にみられる変化を析出し、さらに変化の要因について、外来要素の受容過程、人の移動、そして戦いの痕跡という点から考察している。メソアメリカ社会の転換期の渦中において、チャルチュアパ社会は独自の適応戦略をもって外来要素を受容し、社会を再編していった様子を論じた。

終章では、まず権力資源論や Dual Processual Theory の枠組みを援用しながら、改めてチャルチュアパにおける長期の社会変化について整理した。そして、先古典期から古典期への移行期に画期となる物質文化および社会に変化はみられるが、それは外部集団による介入や影響というよりも、チャルチュアパ在地集団の能動的かつ選択的な戦略によって生じたものであると主張する。筆者は、この戦略を「周縁なるものの戦略」と称し、周縁であることを利用し、戦略的に自らの立ち位置を変え、時代の変化や潮流に対応する社会の姿を描いた。

以上が、本書の概略である。まず断っておきたいのは、本書は、歴史上（あるいは考古学史上）、周縁として認識されてきた社会を積極的に評価し、中心・中央とされる社会に関する研究成果や解釈を蔑むことが目的ではない。また「中心と周縁」という二項対立的図式を固定化しようとしているわけでもない。汎メソアメリカ的に周縁と位置づけられても、地域的により狭い範囲においては、チャルチュアパは「中心」のひとつでもあった。したがって、「周縁なるものの戦略」というのも、メソアメリカレベルにおいてということである。過去の人々が、自分たちを「周縁」と認識していたか否かはわかりようがないという批判もあろう。ただし少なくとも、大きな衰退・崩壊を経験することなく、長期にわたり社会が存続してきたことは事実であり、それを可能にする何らかの戦略があったと指摘することは問題なかろう。

目下の課題は、チャルチュアパ近隣のセンターや集落との関係の解明である。より地理的にマクロな範囲でチャルチュアパがどのような戦略を行使していたのか、あるいは近隣センターや集落はチャルチュアパとどのように対峙していたのか、データを蓄積し、解釈していく必要がある。調査地の治安の問題が深刻で、一筋縄ではいかないのだが、筆者はチャルチュアパから南東に直線距離で約 37km に位置し、アクロポリスなどの建築複合体をもつサン・アンドレス遺跡の調査を 2015 年から開始し、上記の課題解決に取り組んでいる。

少し表紙の話をしておきたい。表紙には 2006 年に発見された様式化されたジャガーヘッドの石彫を選定した。現在のエルサルバドル西部に集中して分布する独特の石彫様式であり、先古典期後期にカミナルフユやイサパなどと観念体系などを共有しつつも、地域独自の様式を創造させたという点で本書の内容を象徴する遺物のひとつと言えるからである。この石彫様式は、2017 年 6 月に発表されたエルサルバドルのサッカー代表の新ユニフォームにデザインされた。改めて、文化遺産が現代社会と強く結びついていることを実感した。もちろん、すぐに購入した。

最後に、本書にはすでに査読審査を通過して学術誌などで掲載された論考も含まれているが、筆者自身としては、至らぬ点も多いと自覚している。自著を読み返せば読み返すほどその思いは強くなり、悶々とする日々ではある。とはいえ、研究の一区切りとして出版できたことは感慨深い。今後、厳しい書評や感想が寄せられることになるだろうが、そうしたフィードバックこそが研究の質を高めることになる。忌憚のないご意見をお待ちしております。

引用文献

市川　彰　2012　「マヤ南部地域における先古典期から古典期の墓制と社会」『古代アメリカ』15 号、1-33 頁

■国際シンポジウム「Violence, Writing and Frontier in Pre-Columbian America」

松本剛（山形大学）

会場の風景（撮影：山形大学人文社会科学部）

去る 3 月 31 日（11:00-17:00）、キャンパス・イノベーションセンター東京（田町）多目的室 4 において『Violence, Writing and Frontier in Pre-Columbian America』と題された国際シンポジウムが開催された。これは山形大学人文学部附属ナスカ研究所および新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）が主催し、古代アメリカ学会および基盤研究（A）海外「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」（研究代表者：関雄二）、新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（研究代表者：青山和夫）、基盤研究（B）海外「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」（研究代表者：鵜澤和宏）による協力のもとで行われたものである。

シンポジウムでは、使用言語を英語およびスペイン語とし、「暴力」、「ライティング」、「フロンティア」という三つのテーマに関連した全 7 つの発表が行われた。発表者は発表順に、長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）、ジョン・ベラーノ（テュレーン大学）、エリザベス・ブーン（テュレーン大学）、坂井正人（山形大学）、山本睦（山形大学）、松本剛（山形大学）、ジェイソン・ネスビット（テュレーン大学）の 7 名である。発表はテーマごとにセッション分けされ、それぞれのセッションでは、ディスカッサントが進行役を務めた。ディスカッサントは、関雄二（国立民族学博物館）、井上幸孝（専修大学）、松本雄一（山形大学）の 3 名である。各発表の持ち時間は 20 分間で、セッション内のすべての発表が終了したのちに、ディスカッサントによるコメントと質疑応答（ともに 10 分間）が続くという形式を取った。

■ セッション①「暴力」

1990 年代に興り、その後急速に発展したバイオ考古学は、現在までに考古学の関連分野としての地位を不動のものとし、考古学に対して様々な重要な研究成果を提供し続けている。当セッションでは、その第一線で活躍している長岡氏、ベラーノ氏が発表を行った。

長岡氏は、暴力による外傷が引き金となって起こる死や疾病は、文化が人間行動にどのような影響を与えるかを知るための糸口であるとし、外傷を示す出土人骨がその直接的な証拠として役立つと主張した。その一例として、ペルー北部高地の形成期遺跡・パコパンパで出土した人骨（建築物の床面で見つかった推定 15～34 歳の男性遺体）の骨学分析の結果が紹介された。長岡氏は、頭部に残る切り傷は、その場所や方向などから、首が切り離される際に付いたものであり、儀礼的生贄の痕跡であると解釈した。これまでに北部高地で儀礼的生贄のバイオ考古学的研究はなく、最初の研究例となるとのことであった。

続くベラーノ氏による発表では、主にペルー北海岸での研究から得られたデータをもとに、バイオ考古学的研究、特に人骨に残る外傷の同定やそれについての解釈が、人類史において戦争やその他の武力衝突がいつ始まり、どのように拡がっていったのかを明らかにするための重要な情報源となりうることが示された。ベラーノ氏は、これまで重用されてきた民族誌や歴史学的資料、図像学的解釈の援用には注意を払わねばならないと主張した。それは、民族誌や歴史学的資料は先入観を含んでいる可能性があり、図像はどのようにも解釈可能であるだけでなく、往々にして形式化されているためである。また、ベラーノ氏は、すでに出土した遺体を屋内で分析するのではなく、バイオ考古学者自身が遺体を発掘し、オンサイトでデータ収集することの重要性を強調した。

関氏によるコメントでは、パコパンパ遺跡での発掘において得られたさらなる詳細な考古学データが追加提示され、長岡氏による議論を一層深めた。

■ セッション②「ライティング」

「ライティング」のセッションでは、ペルー南海岸・ナスカの地上絵（坂井氏）とメキシコ・アステカ王国の絵文書（ブーン氏）を題材に、先コロンブス期のライティングについての議論がなされた。これまでの研究では、ライティングを (1) 筆記 (script; マヤ文字)、(2) 記号 (sign; キープなど)、(3) ピクトグラフ (pictograph; ミシュテカ絵文字やアステカ絵文字、モチェの図像) の三種類に分類してきたが、地上絵もアステカ絵文書も、ともにピクトグラフに属するライティング形式である。

坂井氏は、地上絵に何が描かれたかだけでなく、それらがどのように記述され、保存され、読まれたのかについて議論した。トム・ザイデマによるセケ・システムの研究を参考に、ライティングと景観の関係性に注目しただけでなく、人間行動をも含めた新しい論を展開した。坂井氏は、ナスカ台地においてこれまでに発見された地上絵のタイプとその分布、セトルメントパターン情報などから、地上絵がナスカ台地に点在する集団のテリトリーに関連しており、そばを歩くことによって読まれたと主張した。

一方、ブーン氏による発表では、アステカ王国の絵文書の構造とその読み方についての説明がなされ、物語がどのように記されたのかについて論じられた。アステカ絵文書にはアステカ王国の過去や未来についての予言、イデオロギー的主張、日常生活など様々な側面が描かれた。ブーン氏は、これらをピクトグラフで記述することによって、言葉の壁を超えてグラフィックに情報伝達することが可能となり、多言語社会であったアステカにおいて極めて有効な情報伝達手段として機能したと指摘した。

井上氏によるコメントでは、ヨーロッパ言語の概念にもとづいた「ライティング」の概念の再検討の必要性や、メソアメリカおよびアンデス各文明における長期的視野の必要性が指摘された。さらにそれらを踏まえつつ、スペイン植民地時代の変化も考え合わせて議論していく可能性も示された。

■ セッション③「フロンティア」

最後の「フロンティア」のセッションでは、3 本の発表が行われた。山本氏とネスビット氏の発表がマクロ・スケールにおける地域間のフロンティアに注目するものであったのに対し、松本剛は遺跡内のミクロ・スケールにおける社会集団間のフロンティアに注目した。

山本氏による発表では、ワンカバンバ谷において行われた考古学調査（主にインガタンボ遺跡）の結果にもとづいて、形成期のアンデス最北部地域における社会発展とフロンティアについての仮説が提示された。山本氏によれば、インガタンボは初期段階ではワンカバンバ谷における唯一の祭祀センターであり、社会統合のための小センターとして機能していた。しかし、周辺地域との地域間交流が始まると同時に、地域内における中心的なセンターに変化した。そして、この地域間交流をさらに活発化させることによって、他地域との関係の中で戦略的に発展していったという。つまり、インガタンボ周辺地域は、中央アンデスと北部アンデスのフロンティアであったが、社会政治的な複雑化が進行していた中央アンデスの周縁地域ではなかった。山本氏は、フロンティアは「境界線」ではなく、異なる集団間の社会文化的「交流空間」としてみなされるべきであると結論付けた。

一方、松本剛はペルー北海岸・シカン遺跡の調査をもとに、近年の研究によって指摘されている中期シカン社会（紀元後 950-1100 年）の多元性に注目し、同一遺跡内における異なる集団間のフロンティアに注目することの重要性を指摘した。これまで遺跡中心部で貴族によって行われた祭祀活動については多くの研究が行われてきたが、周縁部に暮らしていたと考えられるモチェの文化背景を持つ一般住民の暮らしについては不明な部分が多かった。松本は昨年始まった周縁部北部（ワカ・アレーナ）での予備調査において、このエリアが居住地であったことを確認し、モチェ様式の埋葬を発見したことを報告した。

ネスビット氏による発表では、主にアンカシュ東部に位置する草創期後期のカンチャス・ウクロ遺跡での発掘調査の報告が行われた。過去半世紀の研究によって、チャビン・デ・ワンタル遺跡に関する知識は深まったが、「チャビン後背地（Chavín Hinterland）」を構成する広大なエリアについてはほとんど何も知られていない。そこでネスビットは、チャビン・デ・ワンタルの北方 25 キロに位置するプッチャ流域のカンチャス・ウクロ遺跡にて新しい調査を開始した。そこから得られた調査結果によれば、出土土器にはチャビン・デ・ワンタルのウラバリウ期や、マラニョン上流もしくはワヤガ流域との繋がりが確認できたという。ネスビット氏は、カンチャス・ウクロでの調査は、チャビン文明の初期段階の様相についての重要な知見をもたらすであろうと結

論付けた。

松本雄一氏によるコメントでは、地域間、地域内、遺跡間、遺跡内など、様々なレベルにおける交流のインタフェースとしてフロンティアをとらえることの重要性が指摘された。また、これと合わせて、周縁概念との関連付けや、実際の研究における分析レベルの設定などの問題点が論じられた。

■国際シンポジウム「アンデスとメソアメリカ—地上絵／絵文書、人身供儀、神殿／都市」

山本睦（山形大学）

（写真提供：山形大学人文社会科学部）

2017 年 3 月 28 日（火）、山形大学人文学部 1 号館 301 教室において、国際学術講演会「アンデスとメソアメリカ—地上絵／絵文書、人身供儀、神殿／都市」が催された。山形大学人文学部附属ナスカ研究所、新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（代表：坂井正人）が主催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

本講演会では、アンデスとメソアメリカの古代文明についての最新の研究成果が聞けるとあり、平日の午後にもかかわらず、参加者は 78 名を数え、盛況であった。

発表者は、講演順にジョン・ベラーノ（テュレーン大学）、村上達也（テュレーン大学）、ジェイソン・ネスビット（テュレーン大学）、エリザベス・ブーン（テュレーン大学）、坂井正人（山形大学）の 5 名である。また、松本雄一（山形大学）が司会および同時通訳をつとめた。

講演会ではまず、ベラーノ氏によって、古代アンデスにおける人身供儀に関する研究成果が述べられた。ペルー北部の発掘データを主な事例としながら、古代アメリカの人身供犠の慣習を適切に理解するためには、文字資料だけでなく、考古資料の分析が必要であり、それら 2 つの情報源を統合し、比較可能な方法を注意深く用いていくことの重要性が指摘された。

次に、村上氏が、メキシコ中央高原における古代都市の起源についての講演をおこなった。メキシコ中央高原に位置する都市遺跡テオティワカンの変容や衰退に加えて、その起源解明に重要な役割をはたすと考えられるトラランカレカ遺跡における現在進行中の発掘調査成果が報告された。

続いてネスビット氏が、アンデス文明の形成と地域間交流をテーマに論を展開した。ペルー中央高地南部のカンパナユック・ルミ遺跡の調査成果のなかでも、とくに黒曜石に焦点をあて、紀元前 800 年ごろに生じた地域間ネットワークのあり方が、社会に大きな影響を与えたことを示唆した。

そのあとでブーン氏は、メキシコ、アステカ王国の絵文書の特性について論じた。過去、未来、宗教的信仰、日常生活など様々な側面が描かれた絵文書は、直接的に情報を伝達するため、言葉の限界を越えて、異なる言語を話す人々でも効果的に内容を理解させることが可能なものであることを指摘した。

そして最後に坂井氏が、山形大学チームが実施しているペルー南部海岸のナスカにおける考古学調査の概要と、地上絵の保存活動に関する講演をおこなった。これまでの調査成果をふまえ、地上絵の役割についての仮説が述べられると同時に、地上絵を最も破壊しているのがわれわれ人間であり、今後の保存活動の重要性が示された。

事務局からのお知らせ

1. 第 22 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会および『古代アメリカ学会会報』第 39 号でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 22 回研究大会・総会を 2017 年 12 月 2 日（土）と 3 日（日）の 2 日間にわたって開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

本学会では研究発表について審査制をとっています。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による後述の「2. 第 22 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、すでに事務局から発送した郵送物に同封されておりますハガキにてご返信をお願いします（2017 年 9 月 30（土）消印有効）。また、12 月 2 日の総会終了後に懇親会を企画しておりますので、あわせてご出欠についてお知らせ下さい。

総会にご欠席の方は、同ハガキによる委任状へのご署名にご協力をお願いいたします。

古代アメリカ学会では、研究大会において、20 回大会より分科会枠を導入しました。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会で判断してください。口頭発表の時間を削って、コメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことは、分科会の判断で可能です。なお、分科会は個人発表と同じ会場で実施します。発表時間が、個人発表と重なることはありません。個人発表と分科会発表をあわせ、口頭発表できる機会は 1 人 1 回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者（変更不可）、趣旨説明（1200 字程度）、全発表者の要旨（各 800 字程度）を取りまとめて、学会事務局<jssaa@sa.rwx.jp>宛てに、2017 年 9 月 30 日（土）午前 10 時（メール必着）までに送付してください。なお、返送用ハガキの「発表申請」については「有」にマルで囲んでご返送下さい。

記

古代アメリカ学会第 22 回研究大会・総会

1．日時：一日目　2017 年 12 月 2 日（土）
　　研究大会　13:00～17:00（予定）
　　総会　　17:00～18:00（予定）
　　懇親会　　18:30～（予定）
　　二日目　2017 年 12 月 3 日（日）
　　研究大会　09:00～12:00（予定）
（発表本数が多い場合は、午後の部もおこないます）

2．場所・会場：**茨城大学水戸キャンパス**
　　（水戸市文京 2-1-1）

2. 第 22 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 22 回研究大会実行委員長
青山和夫

会員より申請があった研究発表については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許諾の可否について通知いたします。

研究発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDF ファイル（またはワードファイル）にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。なお、返送用ハガキの「発表申請」におきまして「有」をマルで囲んでご返送下さい。

1．発表申請者（会員に限ります）
2．発表申請者住所・e-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
3．発表カテゴリー（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
4．発表タイトル
5．研究発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
6．口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
7．発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1-2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキスト

と同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください）A4 判にて、1 ページ 40 字×40 行、横書き、余白は上 35mm、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。

（＊発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは A0 で 2 枚以内によるものとします）

＊送付先：jssaa@sa.rwx.jp（学会事務局）
＊締切：2017 年 9 月 30 日（土）午前 10 時
（メール必着）

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するため、第 20 回研究大会より分科会枠を導入します。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で実施され、発表時間が重なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人 1 回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者（変更不可）、趣旨説明（1200 字程度）、全発表者の要旨（各 800 字程度）を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです（上記をご覧ください）。なお分科会代表者・発表者は、返送用ハガキの「発表申請」の「有」をマルで囲んでご返送下さい。

審査結果については、10 月 16 日（月）頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもおしらせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

＊参考　「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ（平成 23 年 12 月 2 日役員会決定）」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

（内容）
(1)研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。
(2)発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない。

（形式）
(1)（口頭発表をおこなうことができる者）
口頭発表者（実際に口頭で発表をおこなう者）は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこの限りではない。
また、口頭発表者は、会員であれば第 2 発表者以下でも差し支えない。
(2)（発表者および共同発表者の記載順）
発表者名（単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など）は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第 2 発表者以下の共同発表者となることができる。
(3)（複数の口頭発表についての制限）
1 回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人 1 回とする。ただし、複数の共同発表者（記載順を問わない）となることができる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集
本学会の会誌『古代アメリカ』第 21 号（2018 年 12 月発行予定）に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集しています。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、2015 年 12 月改定版の寄稿規定および執筆細目（会誌 19 号・ウェブサイト掲載）をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては、「投稿エントリーカード」の提出

が必要となります(2018年3月31日提出締め切り)。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2018年5月20日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後1～2か月で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：
大平秀一（運営委員、会誌編集担当）
〒259-1292　神奈川県平塚市北金目4－1－1
東海大学文学部アメリカ文明学 [redacted]
Tel. [redacted]　Fax. [redacted]
E-mail:　aant.edit@gmail.com

②会報「43 号」の原稿募集
会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容
○エッセイ、論考など
特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。
○調査・研究の通信
最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。
○新刊紹介
古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。
○その他
会員にとって有益な学術情報。

◎形式
○原稿字数は、写真・図版を含めて4000 字（会報2 ページ分）以内とします。
○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載
○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。
○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切
○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。
送付先アドレス [redacted]
（会誌とは異なるのでご注意ください）
○投稿締切 11 月15 日（水）
○発行予定 1月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお 2 年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行　　口座番号：00180-1-358812
　　加入者名：古代アメリカ学会
みずほ銀行山形支店
　　口座番号：1211948(普)
　　口座名義：古代アメリカ学会

●海外在住の会員向けの PayPal 決済

昨年12月の総会において、インターネット決済で普及しつつある PayPal での決済が、海外在住の会員に対して認められました。希望をされる方は事務局メールアドレス jssaa03@sa.rwx.jp にご連絡下さい。

なお、PayPal による決済は日本円で行い、年会費に手数料（2017 年 7 月現在で 3.9%＋40 円）を含めた金額を学会事務局から請求いたしますので、ご了承下さい。

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2,000 円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

（事務局からのお願い）

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

＜編集後記＞

今号の特集では、ミュージアムの活動に関わる、さまざまな分野の研究者に、フィールドでの体験談や展示の裏話などご執筆いただきました。ご協力いただいた皆様のおかげで、ミュージアムのいまを知る意義深い特集となりました。心より感謝申し上げます。また、会報編集のベテランである福原さんのご尽力なしには会報発行がここまでスムーズにいきませんでした。ありがとうございました。

（小林）

今号は小林さんのアイデアで、新しい趣向の特集ができあがりました。ミュージアムという伝統的な媒体を使った新たな取り組みをご紹介することができました。今号も特集をはじめとした執筆者の方々には色々ご無理をお願いしました。この場を借りて感謝申し上げます。　（福原）

発　行　古代アメリカ学会
発行日　2017 年 7 月 30 日
編　集　古代アメリカ学会　会報担当：小林 貴徳
福原 弘識
古代アメリカ学会事務局
〒990－8560
山形県山形市小白川町 1-4-12
山形大学人文社会科学部 [redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ウェブサイト URL　http://jssaa.rwx.jp/